

心と技術がつながる未来

八代市立松高小学校 6年 野元 優音

「人に寄り添うロボット」

これは、私が妹と一緒に出場した国際的なロボットコンテスト「クープチャレンジ」のプレゼンテーション部門の課題でした。このコンテストは、東京都港区で行われ、全国から百人以上が参加する大きな大会でした。

私は、コンテスト出場が決まった時からずっと、「人に寄り添うロボット」について考え続けました。でも、何も良いアイデアが浮かばないまま、時間だけが過ぎていきました。そんな時、母が言いました。

「身近な人達に寄り添うロボットを思い浮かべてみて。例えば、熊本地震の時に、ここ熊本でたくさんの人達が大変な思いをしたよね。」

その言葉を聞いた時、少し戸惑いました。地震の時に役立つロボットをプログラミングすることは、かなり難しいと感じたからです。

私は、地震の時県外に住んでいて、熊本地震を直接体験してはいません。でも、地域の人々や先生、友達から話をたくさん聞いてきたこと、地震後テレビのニュースなどを目にするたび、自分にも何かできることはないのかと考えたことを思い出しました。地震の時に役立つロボットをプログラミングしてみることに、それがもしかしたらいつか本当にたくさんの人役に立つこともあるのではと考え、妹と話し合い、「災害対策救援ロボット」を作ることに決めました。

「地震の時に本当に役立つ機能は何だろう。」

「どのような機能があれば、安心できるか。」

など、徹底的に話し合い、本当にたくさん悩みました。長い時間をかけて作り上げたロボットには、多くの機能を詰めこみました。緊急地震速報が流れたり、揺れが大きい時にロボット内部に逃げこめるようにしたり、避難時に情報収集できる設定をつけたり、高齢者や子どもが安全に避難できるように、タラップやイスを取り付けたり、暗闇を明るく照らしてくれる機能を付けたりしました。こだわったのは、「安心感」です。非常時の不安を取り除いてくれるロボットこそ、災害時に必要だと思ったからです。

コンテスト当日、緊張しながら妹と二人で大勢の人前でプレゼンテーションを行いました。デモンストレーションをする時に、タラップが外れるというハプニングもありましたが、落ちついて対処することができました。結果は全体の2位にあたる銀賞を受賞することができました。

私は、思いがけない大きな賞を頂くことができたのは、熊本地震の時に何もできなかったという悔しさがあったからだと思いました。これからますますAIが活やくする時代が来ると思います。大会でも、ある大学の先生が、「この技術を未来へつなげてほしい」と言われました。私は、いつか未来に、本当にこのようなロボットが実用化できたらいいなと願っています。